

大坂画壇の文献目録作成に関する問題点

中 谷 伸 生

Problems in Cataloguing the Literature on the Osaka Painting Schools

NAKATANI Nobuo

It goes without saying that compiling a bibliography is valuable for various studies in the humanities, as they provide essential starting points for writing a research paper. In this paper, through focusing on the studies of the Osaka Painting Schools (Osaka Gadan) from the Edo period to the modern era, I would like to point out the problems in compiling a bibliography in this field and discuss its significance.

With the development of the Internet and other technologies, experienced knowledge is no longer required for searching the relevant literature. However, at the same time, such digital advancement is now allowing the researchers to focus on the fundamental elements of the scholarship of the humanities, that is, original thinking and imagination.

キーワード：文献目録、大坂画壇、展覧会、サイニー

はじめに

人文科学のさまざまな研究にとって、参照すべき文献の価値については、今さらいうまでもないほどに重要である。それらの文献を利用して研究論文が執筆されるからである。ここでは江戸時代から近代に至る大坂（阪）画壇の研究内容に的を絞って、大坂（阪）の絵画を焦点化した文献目録の作成とその意義について、研究対象に即して問題点を指摘してみたい。

その場合、文献の性格を①単行本、②展覧会図録、③学会誌や研究誌に掲載される研究論文および資料紹介の三つに区分して論じることとする。もっとも、これら三つの区分から除外されてしまう分野もあるが、暫定的に三つの項目としておく。除外される項目とは、アカデミックな形式から外れる、いわゆるエッセイや随筆、そして研究ノートや作品解説などである。これも美術史研究にとっては重要で、研究論文の執筆にあたっては、頻繁に引用されることはいうまでもない。しかし、論証が複雑になりすぎるくらいがあるため、ここでは上記①②③に絞って議論の対象としたい。その場合、「文献リストの作成に」において、一体どのような問題が起

こるのか、を主たる問題とする。

1. 単行本目録

- 藤岡作太郎『近世繪畫史』、金港堂書籍株式会社、1903 年
高梨光司『兼葭堂小傳』、高島屋兼葭堂會、1926 年
石田誠太郎『大阪人物誌』、石田文庫、1927 年
仲田勝之助『絵本の研究』、美術出版社、1950 年
鍋木清方・菅楯彦『東京と大阪』、毎日新聞社、1962 年
長谷川貞信（三世）遺稿『浪花風俗図会』、千秀堂 杉本書店、1968 年
藤原せいけん『続浪花風俗図会』、千秀堂 杉本書店、1972 年
C. H. Mitchell, *The Illustrated Books of the Nanga, Maruyama, Shijyo and Other Related Schools of Japan*, Los Angeles, 1972.
Jack Hillier, *The uninhibited brush, Japanese Art in the Shijyo style*, London, Hugh M. Moss, 1974.
望月信成『矢野橋村名作選集』、清文堂出版、1975 年
Laurance P. Roberts, *A Dictionary of Japanese Artists, Painting, Sculpture, Ceramics, Prints, Lacquer*, Weatherhill, Tokyo and New York, 1976.
石川淳他編『文人畫粹編 岡田米山人』第十五卷、中央公論社、1978 年
関千代『中村貞以』（現代日本美人画全集 第六卷）、集英社、1978 年
馬場京子『北野恒富／中村大三郎』（現代日本美人画全集 第三卷）、集英社、1978 年
山内長三『日本南画史』、瑠璃書房、1981 年
大阪市立美術館『近世大坂画壇』、同朋舎出版、1983 年
我妻栄吉『三重県の畫人伝』（三重県郷土資料叢書 第 52 号）、三重県郷土資料刊行会、1983 年
松尾靖秋・村松友次・田中善信・谷地快一編『蕪村事典』、桜楓社、1990 年
木村重圭『中村芳中画集』、フジアート出版、1991 年
三重県立美術館『江戸の風流才子・増山雪斎展』、三重県立美術館協力会、1993 年
関西大学図書館『関西大学図書館所蔵 大坂画壇目録』、1997 年
尾形仵・佐々木承平・岡田彰子編著『蕪村全集』第六卷（絵画・遺墨）、講談社、1998 年
中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』、新潮社、2000 年
瀬木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成—書画の価格変遷二〇〇年—』、里文出版、2000 年
山岡泰造『絵画史における中国と日本』、私家版、2000 年
泉佐野市史編さん委員会編『日根対山作品集』（泉佐野市史資料第二集）、2001 年

- 水田紀久『水の中央に在り 木村蒹葭堂研究』、岩波書店、2002 年
- 藤井善男『定本 藤井藍田探究』、新風書房、2002 年
- 今橋理子『江戸の動物画』、東京大学出版会、2004 年
- 橋爪節也編『モダン道頓堀探検—大正、昭和初期の大大阪を歩く—』、創元社、2005 年
- 小川知子他編『島成園と浪華の女性画家』、東方出版、2006 年
- 橋爪節也『大大阪イメージ 増殖するマンモス／モダン都市の幻像』、創元社、2007 年
- アンドリュー・ガーストル・矢野明子編『流光齋図録—上方役者似顔絵の黎明—』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2009 年
- 水田紀久・野口隆・有坂道子編『木村蒹葭堂全集 別巻 完本 蒹葭堂日記』、藝華書院、2009 年
- 熊田司・伊藤純編『森琴石と歩く大阪—明治の市内名所案内—』、東方出版、2009 年
- 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター『長島侯増山雪斎 独樂園賀詞帖』、2009 年
- 中谷伸生『大坂画壇はなぜ忘れられたのか—岡倉天心から東アジア美術史の構想へ—』、醍醐書房、2010 年
- 山本ゆかり『上方風俗画の研究—西川祐信・月岡雪鼎を中心に—』、藝華書院、2010 年
- 奥平俊六編著『懷徳堂ゆかりの絵画』、大阪大学出版会、2012 年
- 千葉市美術館『光琳を慕う—中村芳中』、芸艸堂、2014 年
- 中谷伸生『耳鳥齋アーカイヴズ—江戸時代における大坂の戯画—』、関西大学東西学術研究所、2015 年
- 水田紀久・橋爪節也監修『木村蒹葭堂全集』第八巻 蒹葭堂顕彰・年譜・研究文献目録抄、藝華書院、2015 年
- 橋爪節也編『新菜箸本撰』第十一号（夜雨庵 北野恒富 号）、「心斎橋研究」同人（橋爪節也・中尾靖・荒木基次）、2015 年
- 河野元昭『文人画—往還する美』、思文閣出版、2018 年
- 水田紀久・橋爪節也監修『木村蒹葭堂全集』第二巻 本草・博物学（辰馬考古資料館所蔵）、藝華書院、2019 年

研究書の探索は比較的易しい。ほとんどの書籍が各地の図書館やインターネットで見つかるからである。ただし、ISBN の付いていない出版物、たとえば私家版の書籍などは見つけるのが難しい。たとえば、大坂画壇についても重要な記述のある山岡泰造『絵画史における中国と日本』（単行本 2000 年）などである。大手の出版社から出版された ISBN 付の書籍ならいざしらず、そうでない私家版の書籍の場合、国会図書館はもちろんのこと、各地の図書館にも所蔵されないことが多く、見つけるのに困難が伴う。「見つけるのが困難」というよりも、その存在自体に気が付くことが難しい。ツイッターでの検索なども考えられるが、その「つぶやき」にたどり着くには、こまめな検索と時間がかかる。こうした図書を所蔵する「図書館」が必要

であるかもしれない。推奨すべきは、「日本の古本屋」のサイトでの検索であろう。加えて、橋爪節也編『新葉著本撰』第十一号（夜雨庵 北野恒富 号）（単行本 2015 年）などの私家版による小冊子を大阪地域以外で手に入れるのは難しいが、どのようにして見つけ出すか、という問題も残されている。

ここで採り上げた書籍型の文献は、検索が可能なものばかりである。ただし、こうしたリストを作成するときに、膨大な文献の中から、重要なもの、必要なものを選択するのは意外に難しく、文献リストの作成には種々の困難と問題が浮かび上がる。ここでは美術史関係の文献リストの作成であることから、たとえば、木村兼葭堂の文献については、あまりにも膨大な文献の中から、適切な文献を選択するにあたって、対象を絞る必要があった。まず、美術史関連の兼葭堂文献を上げることにしたが、それでも中間領域の文献について、どこに線を引くかに頭を悩まされた。高梨光司『兼葭堂小伝』（単行本 1926 年）は、必ずしも美術史研究の書とは言えないが、兼葭堂の基本文献であることからリストに上げた。加えて、藝華書院から出版された『木村兼葭堂全集』（単行本 2019 年）なども同様に、水田紀久『水の中央にあり』（単行本 2002 年）も同様のリストアップである。加えて、尾形侑・佐々木承平・岡田彰子編著『蕪村全集』（単行本 1998 年）は、蕪村による絵画のカタログレゾネとなっており、基本文献である。仲田勝之助『絵本の研究』（単行本 1950 年）も見逃せない。また、C. H. Mitchell（単行本 1972 年）、Jack Hillier（単行本 1974 年）、Laurance P. Roberts（単行本 1976 年）らの英文による研究書は、固有名詞の読みなどで、すべてローマ字の読みが付けられているので、しばしば役に立つことがある。日本語の研究書では、しばしば「読み」や「ルビ」が省略されることがあり、読み方に悩むことも多い。これら英文の研究書では、日本美術史の事柄を英語で執筆する苦勞の一端が垣間見えて頭が下がる。

2. 展覧会図録目録

高島屋兼葭堂會『兼葭堂 遺墨遺品展覧會』、1926 年

大阪市立美術館『米山人並半江展図録』、1941 年

大阪市立美術館『西山芳園_并完瑛展覧會出品目録』、1942 年

西宮文化協会『勝部如春齋展』、1969 年

大阪市立博物館『岡田米山人と半江—近世なにわの文人画—』、1976 年

倉吉博物館『菅橋彦・生田花朝女名作展』、1979 年

大阪市立美術館『近世の大坂画壇』、1981 年

読売新聞社『美人画七〇年 中村貞以展』、1981 年

山梨県立美術館『明治の才媛 南画 野口小蘋』、1982 年

博物館明治村『描かれた浪速情緒 北野恒富の美人画』、1991 年

加藤類子監修『モダニズム香る、高雅な女性美—没後十周年 中村貞以展』、奈良・横浜そごう

百貨店、1991 年

井溪明編『近世の大坂画人—山水・風景・名所—』、堺市博物館、1992 年

倉橋昌之・奥田豊編『貫名海屋・近世日本の書聖』、堺市博物館、1992 年

湯木美術館『浪花風俗を描く—菅橋彦展』、1992 年

大阪市立博物館『浪華人物誌 近世大阪の画人 岡田米山人』、1993 年

三重県立美術館『江戸の風流才子・増山雪斎展』、三重県立美術館協力会、1993 年

関西大学図書館『大坂画壇—江戸から昭和に至る絵画—』、1993 年

池田市立歴史民俗資料館『日本画家 上田耕夫・耕冲・耕甫』、1994 年

関西大学図書館『おおさか文藝書画展—近世から近代へ—』、1994 年

大阪市立美術館『庭山耕園・花鳥画の世界—大阪を愛した孤高の写生派—』、1995 年

倉吉博物館『浪速の雅人 菅橋彦展』、1996 年

（財）柿衛文庫・伊丹市立美術館『鬼貫と春卜』、1996 年

枚方市教育委員会『浪華の粋 近代大阪の日本画名品展』、1997 年

関西大学図書館『大坂の書と画と本 関西大学図書館所蔵』、1997 年

成澤勝嗣「画僧・鶴亭の文事」、『佐々木剛三先生古稀記念論文集 日本美術襍』、明德出版社、1998 年

京都文化博物館『京の絵師は百花繚乱—「平安人物誌」にみる江戸時代の京都画壇』、1998 年

大阪市立博物館『近世大坂画壇の調査研究—大阪学調査研究報告書 一』、1998 年

大阪市立博物館『近世大坂画壇の調査研究Ⅱ—大阪学調査研究報告書 二』、2000 年

大阪府立中之島図書館『松川半山展—幕末・明治初期の挿絵画家—』、2000 年

堺市博物館『堺市博物館優品図録 第二集』、2001 年

東京都江戸東京博物館・大阪市立博物館『蕪村 その二つの旅』、2001 年

千葉市美術館『江戸の異国趣味—南蘋風大流行—』、2001 年

小林忠『画家とふるさと』（世界美術双書〇〇九別巻「中村芳中 浪花の自由人」）、東信堂、2002 年

大阪府立中之島図書館『絵草紙に見る近世大坂の画家』、2001 年

枚方市民ギャラリー『矢野橋村展』、2002 年

大阪歴史博物館『没後二〇〇年記念 なにわ知の巨人 木村兼葭堂』、思文閣出版、2003 年

大阪歴史博物館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『日英交流 大坂歌舞伎展—上方役者絵と都市文化—』、2005 年

伊丹市立美術館『笑いの奇才・耳鳥齋—近世大坂の戯画—』、2005 年

関西大学図書館『関西大学創立 120 周年記念—大坂画壇の絵画—文人画・戯画から長崎派・写生画へ—』、2006 年

笠岡市立竹喬美術館・稲沢市荻須記念美術館・高崎市タワー美術館『三都の女—東京・京都・大阪における近代女性表現の諸相—』、2007 年

- 桑名市博物館『増山雪斎～大名の美意識～』、2007 年
- 小川知子編『女性画家の大阪—美人画と前衛の 20 世紀—』、大阪市立近代美術館建設準備室、2008 年
- 芦屋市立美術館『近世大坂文人画の世界—関西大学コレクションを中心に—』、2009 年
- なにわ・大阪文化遺産学研究センター『長島侯増山雪斎 独楽園賀詞帖』、関西大学、2009 年
- 岩佐伸一編『「飛筆將軍」林閨苑—異色の唐絵師—』展目録、大阪歴史博物館、2010 年
- 大阪歴史博物館『水都大阪と淀川』、2010 年
- 神戸市立博物館『若芝と鶴亭—黄檗宗の画家たち』、2011 年
- 池田市立歴史民俗資料館『没後二〇〇年 呉春展』、2011 年
- 岩佐伸一編『幕末大坂の絵師 森一鳳』展目録、大阪歴史博物館、2011 年
- 府中市美術館『三都画家くらべ—京、大坂を見て江戸を知る』、2012 年
- 大阪商業大学商業史博物館『近世浪華の町人と文人趣味』、2012 年
- 笠岡市立竹喬美術館『上島鳳山と大阪の日本画』、2012 年
- 吹田市立博物館『大庄屋 中西家名品展』、2012 年
- 岩佐伸一編『和田呉山と仏の絵画』展目録、大阪歴史博物館、2013 年
- 実践女子学園香雪記念資料館『河辺青蘭—浪華の女性画家—』解説パンフレット、2013 年
- 明尾圭造編『花外楼—老舗料亭の一品』、大阪商業大学商業史博物館、2013 年
- 大阪商業大学商業史博物館『浪花慕情—菅楯彦とその世界—』、2014 年
- 岩佐伸一編『幕末大坂の絵師 藪長水』展目録、大阪歴史博物館、2014 年
- 鳥取県立博物館『没後五十年 菅楯彦展—浪速の粋 雅人のこころ—』、2014 年
- 笠岡市立竹喬美術館・泉屋博古館『生誕一四〇年記念—上島鳳山と大阪の画家たち』、2015 年
- 明尾圭造編『北野恒富と中河内—知られざる大阪画壇の発信源—』、大阪商業大学商業史博物館、2015 年
- サントリー美術館・MIHO MUSEUM『生誕三百年 同い年の天才絵師 若冲と蕪村』、2015 年
- 岩佐伸一・伊藤紫織・松岡まり江編『唐画もん—武禪に閨苑、若冲も』、大阪歴史博物館・千葉市美術館、2015 年
- 岩佐伸一編『月岡雪鼎とその一門—大坂の肉筆浮世絵—』展目録、大阪歴史博物館、2015 年
- 神戸市立博物館『我が名は鶴亭』、2016 年
- 橋爪節也監修『没後 70 年 北野恒富展』、あべのハルカス美術館、2017 年
- 明尾圭造編『なにわ風情を満喫しませう—大坂四条派の系譜—』、大阪商業大学商業史博物館、2017 年
- 西宮市大谷記念美術館『西宮の狩野派 勝部如春斎 18 世紀摂津の画人列伝』、2017 年
- 高松市歴史資料館『東溪と南蘋派—花鳥画の系譜—』、2018 年
- 実践女子大学香雪記念資料館『野口小蘋—女性南画家の近代—』、2019 年
- 三重県立美術館『没後 200 年記念 増山雪斎展』、2019 年

中之島香雪美術館『上方界限、絵師済々Ⅰ』、2019 年

西宮市大谷記念美術館『四条派への道 呉春を中心にして』、2019 年

大阪歴史博物館・熊本県立美術館『猿描き狙仙三兄弟一鶏の若冲、カエルの奉時もー』、2020 年

関西大学 KU-ORCAS・関西大学博物館『大坂画壇の絵画—日本・イギリス共同研究展』、2020 年・2021 年

大阪市立美術館『井口古今堂と近代大阪—船場の表具師と芸術ネットワーク—』、2021 年

梶岡秀一編『発見された日本の風景—美しかりし明治への旅—』、京都国立近代美術館・府中市美術館・愛媛県美術館・長野県立美術館、2021 年

中之島香雪美術館『上方界限、絵師済々Ⅱ』、2021 年

柏木知子編「瀬川コレクション 梅舒適コレクション受贈記念展」、兵庫県立美術館、2021 年

展覧会図録（カタログ）のリストアップは意外に簡単で、ともかく手当たり次第に各美術館のサイトを検索すれば、次々にカタログ類が見出される。しかし、展覧会図録の問題は、いわゆる ISBN が付かないので、書籍扱いにはならず、書店での販売もなされていないことから、国会図書館はいうに及ばず、各地の公立図書館においても、限られた図録しか収蔵されてはいない。我が関西大学図書館でさえ、美術館が刊行している展覧会図録は、発刊された量の千分の一も所蔵されていない。現状と将来を想定すると、美術史文献については、近い将来、ゆゆしき問題が生じることは言うまでもない。欧米の美術書を眺めてみると、いわゆる研究書よりも展覧会図録の方が、研究文献として内容が充実していて主流となっており、日本で出版されてきた美術全集や個人画集は少ない。こうした状況を踏まえると、展覧会図録については、図録の専門図書館の設立が望まれる。むしろこれらの図録に関して頼りになるのは、「日本の古本屋」サイトであるとは嘆かわしい。

また、岩佐伸一氏が大阪歴史博物館で開催している小展覧会、たとえば、岩佐伸一編『月岡雪鼎とその一門—大坂の肉筆浮世絵—』展（展覧会図録 2015 年）の目録や『幕末大坂の絵師藪長水』展目録（展覧会図録 2015 年）など、簡略な解説とはいえ、珍しい記事が含まれていて貴重である。しかし、大規模展覧会の図録ではない小冊子であることと、パンフレットに近い体裁であることから、古書店でも扱うことがほとんどなく、各地の専門家にとっても、目にする機会が少ないのが惜しまれる。こういう小冊子による図録（目録）類をどこでどのように蓄積していくかは重要な課題である。加えて、近年、大坂画壇にも目配りをして、面白い展覧会を次々に開催している府中市美術館の『三都画家くらべ—京、大坂を見て江戸を知る』（展覧会図録 2011 年）も意欲的な企画である。

3. 研究誌論文等

- 大久保恒磨「松屋耳鳥齋」、『上方趣味』大正九年夏の巻、上方趣味社、1920 年
- 中村幸彦「宝暦明和の大阪騒壇—列仙伝の人びと」、『語文研究』第九号、1959 年（『中村幸彦著述集』第六巻 中央公論社 1992 年に再録）
- 吉澤忠「谷文晁筆 木村兼葭堂肖像」、『國華』八〇五号、1959 年
- 小林忠「鶴亭筆富岳図」、『國華』八九八号、國華社、1967 年
- 小林忠「桑山玉洲と木村兼葭堂」、『MUSEUM』二一八号、1967 年
- 土居次義「僧鶴亭の画事」、『茶道雑誌』昭和四十五年四月号、1970 年
- 吉澤忠「岡田米山人筆竹石圖 松齡鶴算圖 騎牛吹笛圖」、『國華』九三五号、國華社、1971 年
- 河野元昭「兼葭堂筆 彩竹図」、『國華』九七五号、1974 年
- 吉澤忠「谷文晁筆 木村兼葭堂住居図藁」『國華』九七三号、1974 年
- 吉澤忠「谷文晁筆 木村兼葭堂肖像画藁」『國華』九七三号、1974 年
- 中野三敏「佚山道人黙隠」、『文学研究』第七十二輯、1975 年
- 大槻幹郎「池大雅と黄檗僧九 鶴亭（海眼浄光）」、『黄檗文華』三十六、1977 年
- 宮嶋新一「三都における南蘋画風の流伝」、『大和文華』第七十三号、大和文華館、1985 年
- 佐藤康宏「葛蛇玉筆 鯉魚図」、『國華』一一三〇号、1985 年
- 宮本又次「田能村竹田と上方（一）」、『大阪春秋』第十五卷三号、大阪春秋社、1986 年
- 脇坂淳「蛇玉山人 新出の蘭石鸚哥図」、『大阪春秋』第十五卷三号、大阪春秋社、1986 年
- 田中敏雄「森派の画人」、『大阪春秋』第十五卷三号、大阪春秋社、1986 年
- 川口玄「日根對山」、『大阪春秋』第十五卷三号、大阪春秋社、1986 年
- 森富雄「森派の絵師たち—わたしの祖先—」、『大阪春秋』第十五卷三号、大阪春秋社、1986 年
- 明尾主造「近代大阪における四条派の評価について—西山芳園・完瑛を中心に」、『大阪商業大学論集』第一九一・一九二合併号、1989 年
- 木村重圭「江阿弥について」、『わたりやぐら』十六号、1990 年
- 成澤勝嗣「学芸員のノートから 画僧・鶴亭の変貌」、『神戸市立博物館だより』第三十号、1990 年
- 杉山知太郎「黄檗僧鶴亭の研究」、『奈良県立美術館紀要』第七号、1992 年
- 橋爪節也「木村兼葭堂とその画業」、『鹿島美術財団年報』、1992 年
- 都良世「森周峯と森派」、『日本美術工芸』六月号（通卷六五七）、1993 年
- 田中豊「美術界の動向・芸能の諸相」、『新修大阪市史』第六巻、1994 年
- 中谷伸生「大阪の四条派画家、西山完瑛の《養蚕図》」、『阡陵』二十九号、関西大学博物館、1994 年
- 山口泰弘「増山雪齋筆 錦鶏鳥圖」、『國華』第一一八一号、1994 年

- 橋爪節也「近世大坂文人画の展開と問題」、『近世大坂画壇の調査研究—大阪学調査研究報告書 一』、大阪市立博物館、1998 年
- 高松良幸「中井竹山をとりまく画家たち—『奠陰集』所収の画賛を中心に—」、『近世大坂画壇の調査研究—大阪学調査研究報告書 一』、大阪市立博物館、1998 年
- 井溪明「耳鳥齋—浪華の風逸画人をめぐって—」、『近世大坂画壇の調査研究—大阪学調査研究報告書 一』、大阪市立博物館、1998 年
- 松浦清「関蓑洲筆・篠崎小竹賛『三星図』について」、『近世大坂画壇の調査研究—大阪学調査研究報告書 一』、大阪市立博物館、1998 年
- 田中敏雄「大坂画壇関係の資料紹介」、『近世大坂画壇の調査研究—大阪学調査研究報告書 一』、大阪市立博物館、1998 年
- 多治比郁夫「琳派の復興者 中村芳中伝資料」、『文学』一一五、岩波書店、2000 年
- 橋爪節也「十時梅屋の研究—『兼葭堂日記』ほか資料を中心に—」、『近世大坂画壇の調査研究 II—大阪学調査研究報告書 三』、大阪市立博物館、2000 年
- 高松良幸「西村孟清について—十八世紀後期大坂における芸苑パトロンの一様相」、『近世大坂画壇の調査研究 II—大阪学調査研究報告書 三』、大阪市立博物館、2000 年
- 田中敏雄「金子雪操筆 山水図襖絵について」、『近世大坂画壇の調査研究 II—大阪学調査研究報告書 三』、大阪市立博物館、2000 年
- 井溪明「四日市市某家所蔵『書画帖』のうち『夜字帖』について」、『近世大坂画壇の調査研究 II—大阪学調査研究報告書 三』、大阪市立博物館、2000 年
- 松浦清「寛政元年の年紀のある谷文晁筆『福祿寿三星図』をめぐって」、『近世大坂画壇の調査研究 II—大阪学調査研究報告書 三』、大阪市立博物館、2000 年
- 中谷伸生「上田耕夫、呉春・蕪村を慕った大坂の四条派」、『関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集』、2001 年
- 木村重圭「江阿弥再考—その生年について」、『姫路獨協大学教育研究論集』創刊号、2002 年
- 中谷伸生「大坂の絵画・兼葭堂とその周辺」、『日本思想史学』三十四号、日本思想史学会、2002 年
- 福井麻純「中村芳中とその時代—芳中にとっての光琳・俳諧・大坂—」、『美学』五十二巻四号（二〇八号）、2002 年
- 中谷伸生「耳鳥齋、ある忘れられた戯画作者」、『美術フォーラム 21』第六巻、醍醐書房、2002 年
- 橋爪節也「死と滅亡の絵画《淀君》北野恒富は、なにを露骨に描いたか」、『美術フォーラム 21』第八号、醍醐書房、2003 年
- 鈴木淳「『光琳画譜』考」、『浮世絵芸術』一四五、国際浮世絵学会、2003 年
- 小川知子「近代大阪の人物誌 島成園と近代大阪の女性画家群像—第二回 恒富、三人の女性画家との出会い」、『大阪人』第五十九巻二号、(財団)大阪都市協会、2005 年

- 中谷伸生「大口金谷編『爾雅积草図(関西大学図書館蔵)―東アジアの本草学・博物学の潮流―』、『美術フォーラム 21』第十二号、美術フォーラム 21 刊行会、2005 年
- 橋爪節也「大阪市美術協会結成における紛擾と『大大阪』の日本画壇・洋画壇」、東京文化財研究所編『大正期美術展覧会の研究』、中央公論美術出版、2005 年
- 奥平俊六「大坂の若冲」、『新修豊中市史 第六巻 美術』、2005 年
- 有坂道子「増山雪斎と木村蒹葭堂」、『混沌』第三〇号、2006 年
- 中谷伸生「菅楯彦、奥谷秋石、阪正臣、山本行範による合作《きつねよめいりの巻》」、『伏見稲荷大社「朱」』第五〇号、2007 年
- 柴田就平「久保田桃水筆『大坂風景画帖』における制作姿勢と粉本主義」、『美学』第五十八巻三号(二三一号)、美学会、2007 年
- 柴田就平「久保田桃水筆『嵐山春景梅尾秋色図』一師西山芳園からの図様の継承―」、『関西大学博物館紀要』第十三巻、2007 年
- 岩佐伸一「唐絵師・林閨苑の作品より」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 日野原健司「大坂画壇胎動期の出版技術―橘守国『運筆龜画』とそれを支える彫師」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 松浦清「飲酒詩を画賛とする米山人の飲酒画について」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 中谷伸生「文人画とは何か―岡田半江《山水図巻(大川納涼図)》をめぐって」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 伊藤紫織「大坂の「唐画」と南蘋風―森蘭齋を中心に―」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 近藤壮「大坂紀州往還の絵画―大坂画壇と紀伊・泉南の文人ネットワーク―」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 宗像健一「田能村竹田と大坂―文政十二年作《目撃佳趣画冊》、《稻川舟遊図》のこと」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 小川知子「女性画家と大坂―文人画から美人画まで、女性たちは大坂画壇を甦らせるか?」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 明尾圭造「大阪的評価の再考―菅楯彦を中心に―」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 橋爪節也「『浪花情緒』のモダニズム―北野恒富と生田花朝の場合―」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 橋爪節也「大坂幕末の書画会―再び狂詩集『浪華醉咏』より」、『新菜箸本撰』第六号(風雅の戯法号)、「心齋橋研究」同人(橋爪節也・中尾靖・荒木基次)、2008 年
- 熊田司「『浮世油画』鈴木蓑斎考―美術と印刷のはざまに消えた、ある大阪洋画先駆者の片

- 影一」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 安來正博「大阪の近代美術 受け継がれる前衛の血脈」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 佐藤守弘「浪華写真のヒストリオグラフィー『月乃鏡』と『写壇今昔物語』、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 前田明範「菅楯彦《浪速堀江市之側之図》」、『美術フォーラム 21』第十七号、美術フォーラム 21 刊行会、2008 年
- 村上泰昭「佚山禅師の肖像画と書画」、『史迹と美術』第七八〇号、2008 年
- 村上泰昭「佚山禅師の書画」、『史迹と美術』第七八二号、2008 年
- 肥田皓三「『がこう絵』の由来」、『藝能懇話』第二十号、大阪藝能懇話会、2009 年
- 橋爪節也「『浪華郷友録』の聞人と大坂の文人画家の問題」、『東アジアの文人世界と野呂介石』、関西大学東西学術研究所、2009 年
- 福井麻純「中村芳中と文人画」、『東アジアの文人世界と野呂介石』、関西大学東西学術研究所、2009 年
- 平井啓修「鶴亭の足跡とその交友—沈南蘋から黄檗へ—」、『東アジア文化還流』第六号、2010 年
- 平井啓修「鶴亭筆《墨竹図》および《芭蕉図》」、『関西大学博物館紀要』第十六号、2010 年
- 平井啓修「鶴亭の作風とその分類—江戸時代における長崎派の一考察」（要旨）、『哲学』、関西大学哲学会、2011 年
- 福井麻純「中村芳中の扇面画の調査研究」、『鹿島美術財団年報 別冊』二九、2011 年
- 中谷伸生「濱田杏堂《掌中延寿》」、『関西大学博物館紀要』第十六号、2011 年
- 橋爪節也「近代大阪と女性画家の時代 第一回 女性の内面を描いた島成園」、『やそしま』第五号、上方文化芸能協会、2011 年
- 中谷伸生「大坂画壇の定義とその問題点」、『関西大学文学論集』第六〇巻第四号、2011 年
- 中谷伸生「大坂の南蘋派—森蘭齋の《西王母図》と《桃と薔薇と白頭翁図》」、『美術フォーラム 21』第二十三号、美術フォーラム 21 刊行会、2011 年
- 橋爪節也「近代大阪と女性画家の時代 第二回 木谷千種」、『やそしま』第六号、上方文化芸能協会、2012 年
- 有坂道子「木村兼葭堂と黄檗の文人文化」、『大阪の歴史』第七八号、2012 年
- 有坂道子「兼葭堂と長崎—鶴亭と黄檗」、『兼葭堂だより』第十二号、2012 年
- 成澤勝嗣「鶴亭筆 墨梅図」、『國華』第一四〇五号、國華社、2012 年
- 飯倉洋一・濱住真有「中井履軒・上田秋成合賛鶉図について」、『懷徳堂研究』第三号、2012 年
- 橋爪節也「近代大阪と女性画家の時代 第三回 生田花朝」、『やそしま』第七号、関西・大阪 21 世紀協会上方文化芸能運営委員会、2013 年

- 中谷伸生「捻じれ歪んだ日本の文人画研究—大雅・蕪村から竹田・半江へ—」、『美術フォーラム 21』第二十八号、美術フォーラム 21 刊行会、2013 年
- 明尾圭造「浪華の風俗画家—玉手棠洲—」、『奈良県立大学研究季報』第二十三卷第四号、2013 年
- 石沢俊「鶴亭の画業に関する研究」、『鹿島美術財団年報 別冊』第三〇号、2013 年
- 福井麻純「中村芳中『花卉図画帖』ともうひとつの芳中画帖」、『美術フォーラム 21』第二十八号、美術フォーラム 21 刊行会、2013 年
- 高杉志緒「上方絵師と狂歌絵本—丹羽桃溪と宮本君山を中心に—」、『詩歌とイメージ江戸の版本・一枚摺に見る夢』、勉誠出版、2013 年
- 石沢俊「研究ノート 鶴亭の印章」、『神戸市立博物館研究紀要』第三十号、2014 年
- 橋爪節也「明治二十一年の巨獣たち—大阪府立博物館美術館の天井画群—」、『大阪の歴史』第八十二号、2014 年
- 中谷伸生「岡倉天心による近世絵画の評価—大坂画壇に言及して—」、『LOTUS』三十四号、日本フェノロサ学会、2014 年
- 馬淵美帆「十八世紀の俳諧文化における光琳評価—『光琳画譜』刊行まで—」、美術史論叢三十一、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室、2015 年
- 奥平俊六「江阿弥と若冲」、『大和文華』第一二七号、大和文華館、2015 年
- 石沢俊「研究ノート 文献資料に見る鶴亭」、『神戸市立博物館研究紀要』第三十一号、2015 年
- 明尾圭造他「奇想の画家はもう飽きた—浪花の町絵師 菅楯彦の世界—」、『大阪商業大学商業史博物館紀要』第十六号、2015 年
- 中谷伸生「林閨苑研究—大坂画壇の奇矯の絵師—」、『東アジア文化交渉研究』第九号、関西大学東アジア文化研究科、2016 年
- 中谷伸生「木村兼葭堂の絵画を貫くもの」、『東西学術研究所紀要』第四九輯、2016 年
- 中谷伸生「森周峯《鮎図》と《虎図》」、『美術フォーラム 21』第三十三号、美術フォーラム 21 刊行会、2016 年
- 橋爪節也「大大阪の画家たち 第一回—生命感の躍動と画家の個性を求めて—北野恒富と歌舞伎、浄瑠璃」、『やそしま』第十号、2016 年
- 中谷伸生「大坂画壇の特質とその再評価」、『泉屋博古館紀要』第三十三卷、2017 年
- 中谷伸生「木村兼葭堂から次世代の画家たちへ」、『関西大学博物館紀要』第二十三号、2017 年
- 中山創太「串珠杯の酒宴記録帖について (1)」、『研究紀要』第三十三号、神戸市立博物館、2017 年
- 中谷伸生「パリ・ソナムラールからの葉書—石濱純太郎宛の小出楢重による便り—」、『東西学術研究と文化交渉』、関西大学東西学術研究所、2018 年
- 中谷伸生「長澤蘆雪と大坂画壇」、『東アジア文化交渉研究』第十二号、関西大学東アジア文化

研究科、2019 年

橋爪節也「大大阪の画家たち 第五回—鍋井克之の『大阪ざらい物語』と『風流座』—“大阪魂”と葛藤する洋画家の深層—」、『やそしま』第十四号、2020 年

明尾圭造「〔資料翻刻〕西山完瑛鑑定収録『鑑定録 甲集』（その一）従明治二十年十月至同二十二年九月」、『大阪商業大学商業史博物館紀要』第二〇号、2020 年

中谷伸生「木村兼葭堂はなぜ笑っているのか—研究をめぐる疑問と課題と仮説—」、『東アジア文化交渉研究』第十三号、関西大学東アジア文化研究科、2020 年

山本ゆかり「岡田玉山の系譜—石田玉山、二代岡田玉山修徳の伝記をめぐる—」、『浮世絵芸術』第一八〇号、国際浮世絵学会、2020 年

谷岡彩「矢野橋村の基礎研究—大正期の画業を中心に—」、『フィロカリア』第三十八号、2021 年

山本ゆかり「玉山筆『大嘗祭図』、『美術フォーラム 21』第四十三号、美術フォーラム 21 刊行会、2021 年

中谷伸生「深田直城の大阪写生派絵画と日本画の近代」、『東アジア文化交渉研究』第十四号、関西大学東アジア文化研究科、2021 年

学会誌、大学の研究紀要、民間の研究雑誌、その他に掲載された学術論文のリストを作成するのは、意外に難しい。展覧会図録の巻末にそれらのリストを掲載するとなると、まず、全体量をどの程度にするかを考え、実際に作成するにあたっては、かなり困難な事態に直面する。たとえば、「木村兼葭堂」を対象にするだけで、その膨大なリストの中、何をどの範囲で選択するかに悩まねばならない。兼葭堂研究の場合、人物とその活動をめぐって、いわゆる一般歴史学的なリストにすると、論文数があまりにも膨大なので、大学図書館などのデータベースならともかく、展覧会図録のようなスペース（頁数）の限られた冊子においては、選択の幅を極端に狭めねばなくなる。今回作成したリストは、美術展覧会用のものなので、絵画に焦点化した、それでも、兼葭堂の基本文献をどうするのか、考えざるをえなくなる。そこで、基本中の基本というべき、中村幸彦「宝暦明和の大阪騒壇—列仙伝の人びと」、『語文研究』第九号（研究誌論文 1959 年）を上げるとして、これに類する他の研究書は除外した。それでよいわけではないが、止むを得ない選択である。

文献リスト作成においては、同じ研究対象の範囲に入っているとはいえ、当然のことながら、内容の充実した論文と、そうでないものが存在する。たとえば、非常に興味深い論文および資料紹介に、山本ゆかり「岡田玉山の系譜—石田玉山、二代岡田玉山修徳の伝記をめぐる」（研究誌論文 2020 年）および「玉山筆『大嘗祭図』（研究誌論文 2021 年）を上げることができる。生涯の事績が不明な岡田玉山についての新しい成果を披露しており、決定打というべきである。

いずれにせよ、網羅的な文献リストは、価値評価を行わず、とにかくすべてを列挙するデータベース化であり、大きな意味をもつ。しかし、展覧会図録などの、重要文献を選択しながら

リストアップする恣意的なリストであれば、やはり充実した内容の文献をリストアップすべきだが、それがなかなか難しい。ほとんどの文献に目を通して選択しなければならないからである。ということは、文献リストの作成自体が、研究者の実力を露わにし、大きな業績にもなるとともに、それ自体が重要な研究の一端となろう。基礎研究として価値のある論文は、明尾圭造「〔資料翻刻〕西山完瑛鑑定収録『鑑定録 甲集』（その一）従明治二十年十月至同二十二年九月」（研究誌論文 2020 年）や、谷岡彩「矢野橋村の基礎研究—大正期の画業を中心に—」（研究誌論文 2021 年）などを上げることができる。

なお、サイニー（CiNii）では、文献によっては、本文そのものも読むことが可能であるが、美術史の論文や書籍の場合、多くの図版が命でもある。しかし、著作権の問題もあって、美術書のデータ化には、しばしば障害に突き当たる。拙著（中谷伸生）『耳鳥齋アーカイヴズ—江戸時代における大坂の戯画—』（単行本 2015 年）の場合でも、かつて Kindle から電子書籍にしないかと誘いがあったが、数百枚にも及ぶカラー図版の著作権あるいは所有権の壁が立ちただけで、断念した。著作権はともかく、所有権というものは、かなり弱いものであるが、写真提供料など、慣例的にさまざまな理由をつけて所有権料を厚かましく要求してくることが多い。美術書のデータ化の難しいところである。

まとめ

リストアップした研究論文は、いわば公の研究誌に掲載されている論文類で、現在では、サイニー（CiNii）という便利な検索機能が存在するので、これらの論文を見つけるのはた易い。昔は、一つの論文を探すのに数年、いや 10 年以上もかかることも珍しくはなく、研究者の実力というのは、埋もれた論文（資料）を探し出すことでもあった。日本各地、また世界の大学や図書館に出入りし、研究者間の人脈を築き上げ、ようやく貴重な論文を手に入れることができることも多かった。そうした活動は、もちろん、経験豊かな年配者に有利であって、若い研究者はそれなりに苦勞した。しかし、インターネット等の普及で、研究環境がすっかり変わってしまい、ある点では、さまざまなデータベースが作成されたことから、若い研究者の方がパソコンの操作が上手く、有利になったともいえる。その意味では、少なくとも論文の探索に関しては、「経験がものを言わなくなった」ので、常識的なことではあるが、人文科学も独創性・思考力・想像力に多くを負うことになったわけで、インターネット等の発達によって、研究本来の核心を見据えた状況が作られ始めたといつてよい。